

2009●図書館展示 11月 2009年11月9日～12月4日

LA PENSÉE MUSICALE

2009年度国立音楽大学
音楽文化デザイン学科音楽研究専修
(音楽学研究コース、音楽情報社会コース)
専門ゼミⅠ・Ⅱ

～チャルメラの精神世界～



実はチャルメラは、外国から日本へ伝来して来た楽器です。同じ種類の楽器は非常に幅広い地域に分布しており、それぞれの文化で独自の役割を果たしています。本研究発表ではチャルメラの歴史を辿りつつ、この楽器がどのように諸文化の精神世界と結びついているかを俯瞰し、そこから音楽と精神世界を結合させる原動力としての「音楽的思考(LA PENSÉE MUSICALE)」を提示します。

2009年11月13日(金) 16時30分～18時30分 6号館110スタジオ

2009 図書館展示 11 月

LA PENSÉE MUSICALE

- チャルメラの精神世界 -

企画 国立音楽大学音楽文化デザイン学科音楽研究専修
(音楽学研究コース、音楽情報社会コース) 専門ゼミ ・
期間 2009 年 11 月 9 日～12 月 4 日
場所 図書館ブラウジングルーム・AV 資料室

～チャルメラの音～

みなさんはこれを聴いて何を想像するでしょうか。おそらく、夜道を漫ろ歩くラーメン屋か、あるいはラーメンの CM などを想像するでしょうが、今回の研究の始まりは、このような音楽の性質についての問いからはじまりました。音楽が何がしかの「概念」を想起させる、いわば「想起性」というものをもっていることは、記号性という、音楽の諸特性の一端を如実に表しています。音楽が何がしかの概念を想起せしめることはすなわち、音楽が一つの「記号」として人間の思考のある部分と結合しているということになります。たしかに、個人レベルでの感覚の相違はあれども、その想起するものは文化において通低する核のようなものを持っているように思われます。否、そのように文化に通低する概念をそなえたものこそ、その文化の音楽といえるでしょう。そのような、文化的思考の中でも特に音楽による思考を取り出した概念、それこそ、本研究のテーマとして掲げられた La Pensée musicale なのです。

～ 目次 ～

「チャルメラ」の原点	2
「チャルメラ」の歴史	2
「チャルメラ」をもっと知りたい!	3
参考文献	3
展示資料	4

ソラシ～ラソ

ソラシラソラ～…

何のメロディかわかりますか？ そう、あの有名なラーメン、チャルメラの CM 曲です。元々は、屋台のラーメン屋の客寄せとして使用されていました。

では、日本人なら誰もが知っているであろうこのメロディを奏でている楽器についてはどうでしょう？
なんという名前の、どのような楽器かわかりますか？

実は楽器の名前も「チャルメラ」といいます。ダブル・リードの楽器です。そしてこの楽器にはたくさんの親戚がいて、世界各地に似たような楽器があるのです。

今年の研究発表会では、チャルメラという楽器をテーマに、あまり知られていないその姿を明らかにしていきます。あなたの知的好奇心をくすぐる内容を、今回は特別に少しだけ紹介します。

「チャルメラ」の原点

チャルメラはダブル・リードの気鳴楽器です。「reed(リード)」とは、元々、英語で「葦^{あし}」を意味する言葉であり、リード楽器と呼ばれる物の多くは、この「葦」で作られています。

今回取り上げるチャルメラも、その例外ではありません。「葦」を意味するラテン語「calamus」が転じて、ポルトガル語「charmela(シャルメラ)」となり、それが日本に「チャルメラ」として伝わったのです。こうしたダブル・リードの楽器の原点は、一説にはササン朝ペルシアの時代に遡るとされており、チャルメラの歴史の出発点もそこにあるとされています。

「チャルメラ」の歴史

それでは、チャルメラがこれまでにどのような歴史を辿ってきたかを見てみましょう。前述のササン朝ペルシア時代の後に、ダブル・リード楽器は、東と西にそれぞれ別れて人々に伝わります。そして2つの異なる歴史を歩むことになるのです。

西へと伝わったダブル・リード楽器はヨーロッパを中心に発達しました。一説によると、その後、今日のオーボエなどの原型となる「ショーム」へと移り変わり、ポルトガルでは最終的には「シャルメラ」と呼ばれる楽器に変遷したそうです。この楽器はキリスト教の典礼音楽で少年合唱団の伴奏に用いられていたといわれており、日本には16世紀後半にキリシタンとともに伝来しました。

一方、東へと伝わったダブル・リード楽器は、シルクロードを通じてインドや中国等で発展しました。インドでは「スルナイ」などと呼ばれている楽器は、中国では「哨^{すおな}」という楽器になっています。インドでは、祭りや結婚式、軍楽など、その場を盛り上げるためにこの楽器が使用されていました。一方、中国では、京劇の一部の演目や行商人の間で、この楽器が用いられていました。日本には16世紀以降に伝わりました。

こうして日本には、様々な歴史を経て、ほぼ同時期に、ポルトガルのシャルメラと中国の哨^{すおな}が伝わりました。今日の日本のシャルメラは、名称はポルトガルからのものですが、楽器そのものは今日も含め中国の哨^{すおな}を継いだものです。

日本では、飴売りの行商人がシャルメラを使用していた他、歌舞伎囃子で中国情緒を表現するために用いています。特に飴売りの行商人のシャルメラは、その後の夜泣きそば屋(夜に、笛を吹きながらソバの屋台をごろごろと引く商売の人)やラーメン屋台の前身と考えられるわけです。

同じ血をひく楽器も、地域によってずいぶん用途が異なることがわかると思います。その楽器の背景にある人間の営みや心理を探るなど、それぞれの様相を多角的に検証することで、一つの楽器をめぐる音楽世界の様子を、研究発表でさらに追究します。

「シャルメラ」をもっと知りたい！

日常生活ではあまり触れることのない楽器を知ること、私たちが普段浸っている音楽の世界はまだほんの一握りにすぎないということを改めて実感できるのではないのでしょうか。

楽器に興味のある方、これからの音楽生活に幅を持たせたい方、ラーメン屋を始めたい方、どなたもお誘い合わせの上、ぜひ研究発表会にいらしてください。

～ 参考文献 ～

- ・ 林謙三著『東アジア楽器考』 株式会社カワイ楽譜、1973年 [請求記号：C19-918]
- ・ 海老沢有道著『洋楽伝来史 キリシタン時代から幕末まで』 日本基督教団出版局、1983年 [請求記号：C35-890]
- ・ 魯大鳴著『京劇への招待』 小学館、2002年 [請求記号：J94-689]
- ・ 柘植元一監修『シルクロードの響き ペルシア・敦煌・正倉院』 山川出版社、2002年 [請求記号：J97-140]
- ・ 柘植元一監修『シルクロード楽器の旅』 音楽之友社、1992年 [請求記号：C55-191]
- ・ 中島幸三郎著『支那行商人とその楽器』 富山房、1941年 [請求記号：C2-728]
- ・ 吉川良和著『中国音楽と芸能』 創文社、2003年 [請求記号：J100-789]
- ・ 瀧遼一著『中国音楽再発見』 第一書房、1991年 [請求記号：C54-046]

～ 展示資料 ～

(パネル)

チャルメラ

楽器そのものは中国のスオナがもととなった。

出典: 柘植元一著『シルクロード楽器の旅』 東京: 音楽之友社, 1992 (p. 45)

スオナ

今日の日本のチャルメラの原形。

出典: 柘植元一著『シルクロード楽器の旅』 東京: 音楽之友社, 1992 (p. 45)

鈴鹿市東玉垣町の唐人踊り

祭の中で使われるスオナと思われる楽器。

出典: 辛基秀著『朝鮮通信使往来; 江戸時代260年の平和と友好』新版 東京: 明石書店, 2002 (p. 99)

太平簫(テピョンソ)手

韓国で用いられた楽器。これも日本に伝わった。

出典: 辛基秀著『朝鮮通信使往来; 江戸時代260年の平和と友好』新版 東京: 明石書店, 2002 (p. 8)

朝鮮通信使の道行で奏された太平簫(テピョンソ)

行列の中に太平簫を演奏する人が描かれている。

出典: 辛基秀著『朝鮮通信使往来; 江戸時代260年の平和と友好』新版 東京: 明石書店, 2002 (p. 9)

江戸時代、朝鮮半島からの使者としてたびたび日本に訪れた朝鮮通信使たちは、その道中、自国の音楽を行進曲として演奏した。その中には、喇叭などのほかに、日本のチャルメラの起源の一つと目される太平簫(テピョンソ)も含まれているが、彼らの風体や音楽は、いわば鎖国状態にあった当時の日本人に大きな衝撃を与え、その余韻として各地には今もなお朝鮮通信使を模した芸能が伝承されている。朝鮮通信使たちの演奏したチャルメラの母体は、日本の庶民文化、ひいてはその精神世界にどのような足跡を残したのだろうか。

琳派の画家鈴木基一(1796～1858)が描いた「飴売り図」

鳥の尾羽をつけた朝鮮風の帽子に中国風の服を着た飴売りが右手に太鼓をもち、唐人笛〔チャルメラ〕を吹いている。うしろには天秤棒でかつぐ飴の箱が見える。

出典: 牛嶋英俊著『飴と飴売りの文化史』 弦書房, 2009 (p. 56)

明治40年初版の『当世風俗50番歌合』に描かれた唐人笛(チャルメラ)を吹く飴売り

尻からげた着物に股引をはき、肩に掛けた箱にたくさんの小旗を立てている姿は、大正から昭和初期に青森県津軽地方で見られた「カラミ飴屋」の姿を彷彿とさせる。カラミ飴屋は、テコン箱という箱を背負い、箱の上には子供がよるこぶ風車や日の丸の小旗を盛り込んでいた。「ピピ」とよばれるチャルメラで軍歌やわらべ唄を吹いて子供を集めたという。しかし、カラミ飴屋の容姿が唐人風であったのに対し、この絵の飴売りは和服である。これは、すでにチャルメラそのものが「唐」というコードを有する記号と化していたことの証左であろう。

出典: 牛嶋英俊著『飴と飴売りの文化史』 弦書房, 2009 (p. 56)

『明治博多往来図会』に描かれた博多のチータラ飴売り

図には天秤に振り分けた荷の片方に蓋のある壺状の大型容器、もう片方には大きな袋の上に篩(ふるい)がある。唐人風の衣装に「匏(かんな)屑製の帽子」をかぶり、人集めに「チータラ喇叭(ラッパ)」を吹いていた。ラッパは紙や真鍮製で「トロチイレロトロウ……」と特異な音色であり、飴売りの名はその音色に由来するという。ここでいうラッパはチャルメラの謂であり、このような両者の混同は当時の記録に散見され、興味深い。

出典: 牛嶋英俊著『飴と飴売りの文化史』 弦書房, 2009 (p. 62)

及川鳴り物博物館(東久留米市)所蔵のチャルメラ系統の楽器

ただし一部を除き、名称・製作地・年代・使用地域は不明。

撮影: 平田瑞穂

シャハナーイー

この楽器は中東から入ってきた楽器と解釈されている。ペルシア名でスルナーイーとよばれていたものがインドでシャハナーイーという名前に変化した。

出典: B. C. デーヴァ著; 中川博志訳『インド音楽序説』 大阪: 東方出版, 1994 (p. 87)

シャハナーイー

シャハナーイーは2枚のリードをつけて吹くダブルリードの楽器。指孔は、たいてい8孔ある。
出典:アラン・ダニエル著『南アジア；インドの音楽とその伝統』(人間と音楽の歴史. 第1シリーズ, 民族音楽；第4巻) 東京：音楽之友社, 1985 (p. 33)

シャハナーイーを使ったアンサンブル

このアンサンブルは、ナウバトと呼ばれる古いインド音楽の形態の一つである。
出典:アラン・ダニエル著『南アジア；インドの音楽とその伝統』(人間と音楽の歴史. 第1シリーズ, 民族音楽；第4巻) 東京：音楽之友社, 1985 (p. 33)

ズルナ

トルコやインドを始め、シルクロード周辺の広い地域に渡り分布している。
出典:柘植元一著『シルクロード楽器の旅』 東京：音楽之友社, 1992 (p. 44)

ズルナを吹くアルメニア人, 1972年

出典:シャーロシ・バーリント著、横井雅子訳『ハンガリーの音楽～その伝統と語法～』 東京：音楽之友社, 1994 (図 42)

結婚式にて、踊りながら演奏するズルナとダヴル

出典:那谷敏郎著『トルコの旋舞教団』 東京：平凡社, 1979 (p. 122-3)

15世紀以前のショーム

円錐状の形が特徴。

出典:Walter Koschorreck “Minnesinger : in Bildern der Manessischen Liederhandschrift” Frankfurt am Main : Insel-Verlag, 1974 (insel taschenbuch, 88) (p. 57)

女王の共をする二人のシャルマイ吹きとトランペッター(15c)

出典:エドモンド・A. ボールズ著『15世紀の音楽生活』(人間と音楽の歴史. 第3シリーズ, 中世とルネサンスの音楽；第8巻) 東京：音楽之友社, 1986 (p. 29)

シュンダ・ターロガトを吹く男性(ペルベテ, コマーロム県, 北部ハンガリー), 1967年

出典:シャーロシ・バーリント著、横井雅子訳『ハンガリーの音楽～その伝統と語法～』 東京：音楽之友社, 1994 (図 43)

リード楽器の祖先

出典:アンソニー・ベインズ著；奥田恵二訳『木管楽器とその歴史』 東京：音楽之友社, 1965. (p. 209)

18世紀の他の木管

8番、トレブル・ドイチェ・シャルマイ。

出典:アンソニー・ベインズ著；奥田恵二訳『木管楽器とその歴史』 東京：音楽之友社, 1965. (p. 368)

プレトリウスの書物より

6番、現代のショームと言われているカタロニア地方に伝わる楽器、トレブル。

出典:ミハエル・プレトリウス著；郡司すみ訳・注『音楽大全. 楽器誌』 東京：エイデル研究所, 2000 (p. 283)

(書籍)

ジャン＝ジャック・ナティエ著；足立美比古訳『音楽記号学』新装版

東京：春秋社, 2005 請求記号 J104-971

音楽を「構造」「創造」「聴取」の複合体とする独自の思想を、幅広いジャンルの音楽理解に応用した音楽記号学の古典的名著。音楽の記号論的研究という根本的視座は本研究と問題意識を共有しており、また民族音楽に対する諸所の考察はチャルメラ研究にとって示唆的である。しかし、音楽の記号論的側面への言及のみにとどまらず、チャルメラを素材として、音楽を記号たらしめる原動力、すなわち「音楽的思考 La Pensée musicale」という概念を構想する試論的性格を有する本研究は、『音楽記号学』とは目的を異にしていることを強調しておきたい。

柘植元一著『世界音楽への招待』

東京：音楽之友社, 1991 請求記号 C53-806、他

黒沢隆朝著『図解世界楽器大辞典』

東京：雄山閣出版, 1972 請求記号 C30-265、他

魯大鳴著『京劇への招待』

東京：小学館, 2002 請求記号 J94-689

辛基秀著『朝鮮通信使往来；江戸時代260年の平和と友好』新版
東京：明石書店, 2002 請求記号 J95-005

植村幸生『韓国音楽探検』
東京：音楽之友社, 1998 請求記号 C63-193

柘植元一, 植村幸生編『アジア音楽史』
東京：音楽之友社, 1996 請求記号 C61-111, 他

柘植元一著『シルクロード楽器の旅』
東京：音楽之友社, 1992 (Music gallery ; 34) 請求記号 C55-191, 他

黒沢隆朝著；東洋音楽学会編『東南アジアの音楽』
東京：音楽之友社, 1970 (東洋音楽選書 ; 8) 請求記号 C27-420, 他

B. C. デーヴァ著；中川博志訳『インド音楽序説』
大阪：東方出版, 1994 請求記号 C59-167

那谷敏郎著『トルコの旋舞教団』
東京：平凡社, 1979 (平凡社カラー新書. 聖域行 ; 4) 請求記号 C36-566

細川直子著『トルコ 旅と暮らしと音楽と』
東京：晶文社, 1996 請求記号 C61-181

シャーロシ・バーリント著, 横井雅子訳『ハンガリーの音楽～その伝統と語法～』
東京：音楽之友社, 1994 請求記号 C59-053

上尾信也著『歴史としての音 ヨーロッパ中近世の音のコスモロジー』
東京：柏書房, 1993 請求記号 C57-755

デイヴィッド・マンロウ著；柿木吾郎訳『中世・ルネサンスの楽器』
東京：音楽之友社, 1979 請求記号 C28-949

ミヒャエル・プレトリウス著；郡司すみ訳・注『音楽大全. 楽器誌』
東京：エイデル研究所, 2000 請求記号 C64-726, 他

アンソニー・ベインズ著；奥田恵二訳『木管楽器とその歴史』
東京：音楽之友社, 1965 請求記号 C17-891, 他

エドモンド・A. ポールズ著『15世紀の音楽生活』
東京：音楽之友社, 1986 (人間と音楽の歴史 第3シリーズ, 中世とルネサンスの音楽 ; 第8巻) 請求記号 C18-021, 他

ヴァルター・ザルメン著『16世紀の音楽生活』
東京：音楽之友社, 1985 (人間と音楽の歴史 第3シリーズ, 中世とルネサンスの音楽 ; 第9巻) 請求記号 C18-163, 他

ヴァルター・ザルメン著『17, 18世紀の舞踏』
東京：音楽之友社, 1993 (人間と音楽の歴史 第4シリーズ, 1600年から現代まで ; 第4巻) 請求記号 C57-796, 他

(録音資料)

『世界楽器カタログ. 南アジア・西アジア・ヨーロッパ編』
[Tokyo] : Columbia, 1993 請求記号 XD21382-3

展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>